

1. はじめに

街道を歩いてみて思うのは大名の懐事情は、殿様や家臣のお給金は、等々。ここでは大名の経済事情として大名の年収や家臣の給金・暮らしぶり等、について述べたい。



写真3 上：米俵、
下：三反一区画

2. 歴史展望のための準備

大名の経済力を加賀百万石といったように石高で示しているが、これを現代世界でどう解釈するのがいいのか。例えば、今のお金にしていくらか、家臣数、領地の広さはどうか、等。この節では、歴史展望の準備として米価格を中心に述べる。

2.1 米量と農地面積 生活の指標として米消費がある。これは容積で計量され、単位は「石」である。

1石 = 1人が1年間食べるコメの量
360日×3合/日=約1000合

収穫量と農地面積については、(今は1反3.5石)

1石=1反=01.ha=100m*100m

2.2 米の価値 価値換算については、何に着目した昨今比較かにより値が結構異なってくる。昨今比較の対象としてよく引き合いにだされるのが、コメ、大工給金、蕎麦である。結論は**1石=1両=10万円**
<1>コメに着目

・現在は生産量向上と消費量減のため価格が低下。平成初期までは俵3万円弱。→1石=4俵=10万円
・江戸時代では1両で買えたコメの量は、江戸中期で150kg(1石)。→1石=1両=10万円。

<2>大工給金(440文/日)と蕎麦代金(一杯16文)とから換算すると、1文=25円、1両を4000文として
1両=10万円

3. 大名の年収、県域の基礎力

石高を中心にして大名の規模を推し量ってみよう

3.1 領地

富山県域では55万石(富山藩10万石、新川・砺波35万石、他10万石)であるので、耕地総面積は
 $55万*0.1ha=55,000ha$ (県全面積の13%)

この値は今(2011年度県調査)の57,000haと変わらず。

3.2 大名の石高 大名の石高は領主と領民のもの。税率四公六民として一万石大名の取り分は、

公称1万石=10億円のうち4億円

富山県域全体ならば、55万石=550*0.4=22億円

ただし莫大な利益を上げている葉売り益は対象外。

3.3 人口: 江戸初期は1500万人、幕末期3000万人。明治初期1873(明治6)年では、人口は、全国3,340万人、富山県域62万人、富山城下3.3万人(江戸時代1.7万人、平成合併前20万人)、金沢城下12万人(江戸時代13万人、平成合併前30万人)

なお、石高からの人口試算では1石1人のレートを適用し、富山県域55万石ゆえに圏域人口は55万人であり、実数の62万人とは合う。(今は100万人)

3.4 家臣数 大名の家臣数に関する資料が少ない。赤穂藩5万石の例では、家臣は国元300人+江戸詰め100人程としても計400人であり、1万石80人のレート。当時から多すぎといわれていたので、家臣適正数は1万石あたり60人程ではなかろうか。

上記レートで富山県域における家臣数を試算すると富山県域 $55万石*60人=3,500人$

参考のため、戦時下の1万石家臣200人レートでは $55万石*200人=11000人=ほぼ1万人$ 。

今の富山の場合、自治体の職員数は、県で15,000人オガ、市で4,000オガであるので、県と市を合わせて2万人ならば、1万石家臣200人レートに近い数値となっている。

3.5 給金 給金については、石高割家臣数ではなく藩の運営費も勘案しての割り出しとなるが、家老等高級取りは別にして、勝海舟の旗本時代の給金40石を参考に給金平均値として40石/人が目安となる。

ではこの給金の支出はどうであろうか。家臣一人(主人)にその家族が6~8人すると、食料としてのコメだけでも10石、コメ以外の食糧で10石、女中や衣料や贅沢で20石、ということで生活様様がみてとれる。

3.6 土農階層の取り分

江戸時代の総石高は2500万石程、総人口3000万人(士175万人、農2000万人)、途中計算略して
武士一人あたり $1000万石/175万人=5.7石$

農民一人あたり $1500万石/2000万人=0.75石$
農民の場合、一人当たり1石未満。また庄屋の取り分が多いので、小作農の農民は食うに困っていたことが数字でも理解できる。

4. おわりに 大名の経済事情として領民や武士の懐具合を垣間見るとして、石高に基づいて当時の収入や領地などを今日との対比で述べた。当時と今の生活水準をにらんでの種々事項の対比とはいえ、今日コメを食す我らは、当時を親近感をもって接することが出来たともいえる。